

「本の中に喜びを見出すことによって、そして、本の中で人生の悲しみを知ることによって、

○子どもたちが、自分の中に、しっかりととした根を持つために

○子どもたちが、喜びと想像の強い翼を持つために

○子どもたちが、痛みを伴う愛を知るために

ご参加のIBBYの会長並びに会員の皆様におかれましては、IBBYの大切な仕事をお続けください。」と述べられました。

文化庁長官や京都大学名誉教授等の要職を歴任された、分析心理学の巨星、河合隼雄先生（1928～2007）が、この基調講演を絶賛されました。

「知人が、『あまりにも感動したので。』と、基調講演録をファクスで送ってきた。早速に読み、深い感動を味わった。それは、魂に至る言葉に満ちていた。ご自分の体験を通して、本から得た喜びを語られ、子どもが読書することについて、『しっかりとした根』『喜びと想像の強い翼』『痛みを伴う愛』という言葉によって、その意義を示されたことは、われわれ児童文学を愛好する者にとって、かけがえのない示唆を与えられたと感じている。」

美智子皇后陛下の基調講演には、「読書週間だから、本を読もう。」とか、「本や新聞を読むと、学力が高くなるから、読書をしよう。」とか、通り一遍の読書の薦めはまったくありません。本と共に生きるこの本源的な喜びと、ぜひともその喜びを子どもたちも体験してほしいというひたむきな思いにあふれています。

このお言葉は、老生にとって、今日までに接した読書に関する名言や警句の中で最も感動的で、最も共感できる至言であり、40数年前の、新任教師のころの疑問を氷解させてくれたのです。

ある日、初任の中学校の先輩教師が老生に、「趣味は何ですか？」と訊きました。

老生は迷うことなく、「趣味は読書です。」と答えました。もちろん、「私は、これまで楽しみで本を読もうと思ったことはほとんどない。私はいつも新しい発見を求めて本を読んでいる。人間の最も大切な本能は新しい発見を求める心だと思っている。」と語った某ジャーナリストや、「面白い物語に耽溺し、美しい日本語に陶然としていれば幸福だった。」と述べた某作家の桁外れな読書歴には足元にも及びませんが、それでも本が好きだったからです。

すると、先輩教師が、「そうか、読書が趣味か。」とつぶやきながら、表情に

心なしか失望の色を浮かべました。しかし、その時、新米教師にはその失望の意味が分からなかったのです。

皇后陛下の教えに出会ってから初めて、先輩教師は、「読書を単なる趣味や娯楽、余暇利用にとどめてはいけません。読書は、衣食住と同様に生活の一部であり、生きるために必須の営みである。」と後輩に伝えたかったのだ、と気がきました。

読書とは、その子の好き嫌いでもなく、もやもなくともよいという活動ではなく、生き方や考え方を高めたり、豊かにしたり、深めたりするために、すなわち、子どもたちの健やかな成長のために、欠くことのできない営みなのです。



平成10年のIBBYは、開催国インドで核実験が行われたため、急遽、出席を中止され、ビデオによるご講演であったそうです。

その4年後、美智子皇后陛下は、前例

のない皇室史を刻まれました。IBBY創立50周年記念スイス大会に、天皇陛下の励ましを得て、IBBY名誉総裁としてお一人で出席されたのです。そして、この大会においても、「もしかしたら、

私は私の中に今もすむ、小さな女の子に誘われてここに来たのかも知れません。」という心に残るスピーチをされました。

§

春三月は、児童・生徒にとって、分去れの場合であり、会者定離の時です。

この大切な節目に、児童・生徒誰もが、分去れと会者定離にきちんと向き合い、「痛みを伴う愛」を体験し、本の中に人生の喜びや悲しみを見出すことによって、心の中によりしっかりとした「命の根」を張ることを願っています。

児童・生徒が、自分の中に、しっかりとした「命の根」を持つことによって、四月の新たな「出会い」が、より意義深いものになると信じているからです。

《参考文献》

「皇后陛下のお言葉集あゆみ」

宮内庁侍從職監修・海竜社

「天皇家の仕事」高橋紘著・共同通信社

「皇后美智子さま」浜尾実著・小学館

「美智子皇后の70年女人抄」

藤原佑好著・イースト・プレス

「美智子妃」河原敏明著・講談社 ほか